

## 第1回 府立須知高等学校の在り方検討会議（概要）

- 1 日 時 平成28年12月26日（月）午後3時30分～同5時30分
- 2 場 所 京丹波町中央公民館
- 3 出席者 18名  
府教育委員会 川村指導部長、山本高校教育課長、  
中島高校改革担当課長、宮下首席総括指導主事 ほか
- 4 概 要  
(1) あいさつ  
(2) 報告・説明  
(3) 意見交換（主な意見）

---

### ■報告・説明

□府教育委員会：資料説明

□須知高等学校長：学校概要について説明

- ・ 須知高校では「地域と共に歩む学校、地域を支える人材を育成する学校」「『土から食卓までを結ぶ』新たな専門教育を開く学校」を目指し、平成25年からの中期目標に掲げているところ。今年度は京都府教育委員会「地域創生推進校」「ハイスクール起業チャレンジ実践校」の指定を受け「リスタ須知 夢無限大∞ 挑戦と躍進！！」を学校運営のキャッチフレーズにしている。
- ・ 今年度の重点目標としては「学力向上と進路保障」、「食品科学科あるいは普通科の地域との連携による探求的な学び」、「生徒指導と部活動の充実による学校の特色化」、「地域と共に歩み信頼される学校づくり」を教育活動の4つの柱として進めている。
- ・ 普通科60名と食品科学科の40名2学科を設置。普通科では特色として2クラス60名の普通科を3コースに分けて学習している。スーパーアドバンスコース（SA）は、進学に特化したコースで平成26年度から始め、今年度初めて卒業生が出る。そのほか、アドバンス文理コース、スタンダードコースがあり、それぞれの進路希望に応じてきめ細やかな指導を進めているところである。食品科学科は、平成6年度の学科改編によって農業畜産科を改編したもので、2年次から希望により食品加工コースと公園管理コースとに分け、2・3年生で学びを深化させている。
- ・ 教職員は現在66名。生徒の募集定員は3年生が120名、1、2年生が100名で計320名だが、在籍は現在205名という状況。
- ・ 部活動の加入状況は、男子が60名、女子が35名、合わせて95名で、加入率は残念ながら50%に満たない状況である。
- ・ 進路のサポートシステムは、学力的に多様な生徒がいるため、基礎学力をしっかりつけて自分の進路希望を達成させる取組を1年次から進めている。進路状況も多様であるがおかげさまで今年度も就職内定率はほぼ100%達成の見通しである。近年の進路先は、地元京丹波町のほか、南丹市、亀岡市、そして京都市などであり、幅広い地域で活躍している。公務員試験にも合格している。この3年間の専門学校の進学については、食品科学科があるため、調理、製菓、栄養にかかわる学校への進学が多いのかと思っている。
- ・ 京丹波町では小学校からホッケーに取り組む子どもがいるため、本校でホッケー一部に入り全国レベルの競技力を維持している。男子ホッケー一部が3月の全国選抜に出場することが決まっており、女子ホッケー一部も部員数は少ないが活躍している。硬式野球部も現在部員が7名ではあるが冬季トレーニングに取り組んでおり、子どもの意欲を駆り立てるべく顧問が毎日励んでいるところである。

■意見交換（主な意見） ○：出席者 ◆：府教委 ◇：進行

◇ 須知高校の現状を踏まえ、それぞれのお立場から、須知高校をどのように捉えていただいているのかお聞かせいただきたい。まず、地元中学校の進路選択の状況についてはどうか。

○ 本年度の中学生の進路希望状況は概ね資料のとおりである。本校では本年度かなり多様な進路選択をしており、園部、亀岡高校のほか、舞鶴工業高等専門学校や海洋高校、私学を9名程度希望している。昨年度は、須知高校に卒業生57名中28名と約半数が入学させていただいたが、今年度の3年生は73名中希望者が23名と30%程度である。今後少しは増えると思うが減っている状況である。

これは、一昨年度の傾向に概ね戻っている状況であり、背景としては生徒指導上の課題があげられる。昨年度は、生徒指導上や学力に課題のある生徒も受け入れていただける須知高校への志望が強く、他校に気持ちが動かなかつたのだと思う。ただし、昨年度も今年度も成績上位層は他校に向いており、その傾向は続いている。さらに、今年度は昨年度に比べて部活動を頑張りたいという生徒や、多様な進路先を希望する生徒が多いことに加え、小・中学校の時から続く人間関係を新たにしたいと、地元から多くの生徒が通っている須知高校以外の高校を希望する生徒もおり、その点では大変厳しい状況がある。

蒲生野中学校で生徒指導上厳しい状況であった生徒が須知高校にお世話になっているので、希望者数の話を言われるとどうしようもないのだが、須知高校の努力と改革の取組、蒲生野中学校の立て直しによって生徒指導面はかなり改善したし、今後もこの傾向は続く。成果となって表れるのはこれからだと確信している。

須知高校には本当にお世話になっており、この秋も須知高校の先生に中学校の放課後の補習に来ていただいたのだが、生徒たちはずいぶん喜んでいて。また、高校にも確かな手応えを感じていただいた。須知高校は少人数密着型で指導されており、大学進学でもSAを中心に大きな成果を挙げておられ、弱い立場にある生徒の守りの要であると思っている。また、京丹波町の産業ネットワークとの連携によるインターンシップにより、須知高校の印象がじわじわ変わりつつある。SAの成果・評価、食品科学科の評価に加えて、丹波観光プランコンテストなどの活躍で須知高校もどんどん変わっていくのではないかと。須知高校の在り方については、人数だけではなくそうした視点で捉えることが大切だと思う。京丹波町総合計画の要になる須知高校が、若者にとって誇りのシンボルになるような存在感を創出していくべきであるし、そうなってくれると思っている。そのために府としてもぜひ支援していただき、須知高校を通して発信していただくことが必要ではないかと思う。

◇ 昨年度、京丹波町のまちづくりにおける須知高校の今後の在り方・活性化策について懇話会を設置して検討されたが、その概要などについて紹介いただきたい。

○ 平成28年度は町が合併してから10年が経つ。第二次京丹波町総合計画の策定にあたり、京丹波町唯一の高校である須知高校のあるべき姿について、総合計画の中でしっかり押さえたいという町長の方針に基づき、学校長をはじめ中学校長や同窓会が参加して、存続可能な須知高校の姿を探求しようと忌憚なく意見を出し合い、町にまとめを提出した。

京丹波町にとって、公立高校は人材を育成し、地元の担い手として働く若者を育成する機関という役割があると思う。地域社会を守る教育機関の役割という観点から、須知高校において、地域の人材・担い手としての教育をしていただき、この故郷を守る素晴らしい人格形成をしてもらうためにも、なんとしても残してほしいという意見が多くあった。そういう観点で須知高校のあるべき姿や求める教育について議論してきたし、同時に町として須知高校を支援する選択肢として何があるかを議論してきた。京丹波町には、町長をはじめ職員に須知高校の人材育成を支えてい

きたいという熱い思いがあり、京丹波町として須知高校にどのような支援ができるのか、ということも議論してきたわけである。町の財政は非常に厳しい中であるが、一定の経済的支援ができないかと、須知高校に係る連携協議会をつくり、町長も出席していろいろと話をされているようだが、そうした成果が徐々に見えつつある状況である。須知高校の成果が徐々に伸びつつあるという評価もある。課題もあるが、校長をはじめ個々の教職員の努力が徐々に実りつつある。中学校の須知高校に対する進学率は極めて残念だが、そういう側面もしっかり見据えながら改良していきたいと思う。

- 須知高校の食品科学科に在籍し、乳製品の加工を学んだ。食品科学科への進学理由は、祖父母から受け継がれてきた酪農を親が継いでおり、酪農に携わる仕事に就ければと漠然とだが思っていたためである。

近所の酪農家の子どもたちも、食品科学科・畜産科に進学し、畜産や加工の勉強をして家業を継いだり、北海道や東北の酪農家に研修に行くことが一般的であったので、私も当然のように食品科学科へ進学した。私はものづくりに興味があったので、加工をメインに勉強した。その後、酪農と加工は北海道が本場のため、北海道での就職を希望して10数年そちらでチーズ製造に関わり、3年前から実家に戻ってチーズ工房を立ち上げたところである。須知高校でチーズやアイスを製造する機械に触れる経験を積んだことで、就職した工房で即戦力として考えていただくなど、高校で学んだことがすぐに社会に出て役立った。今後の目標としては、スキルアップはもちろんだが、食品科学科の生徒が憧れる職業にするというか、酪農やチーズの加工に携わりたいと思うような目標になる会社にしていきたいと思っている。

- 私は平成7年に須知高校を卒業した。狭い話かもしれないが須知高校に関してはホッケーについての思いがある。私自身、京都国体があった小学生の時にホッケーに触れ、その後、中学生では全国優勝し、須知高校進学後もインターハイに出場するなど、3年間ホッケーを頑張った。

就職後はしばらくホッケーから離れていたが、自分の子がホッケーをやりたいと言い出したこともあって、3、4年前から小学校のスポーツ少年団の指導をしている。地元でホッケーをやりたい、続けたいという強い思いをもっている子が徐々に増えてきていると思う。小学生になる私の子どもや周りの子どもたちの中には、ホッケーをやりたい、やるなら須知高校へ行きたいという思いがあると肌で感じている。町を挙げて支援していただき、非常に素晴らしいホッケー球技場を整えていただくなど恵まれた環境がある。指導者として全国で戦ってきた優秀な人が多いため、環境が良くて指導者も良いと育っていくのかなと思う。小学校段階からホッケーを通して育てていくことで、須知高校へとつながっていくのではないかと感じている。

隣の兵庫県篠山市もホッケーが盛んで、全国大会でも上位に入る素晴らしい選手がいるが、その子どもたちが高校でホッケーをするところがないとも聞いている。その子どもをこちらに連れてくる手立てがあると、よりホッケーを通して学校を盛り上げていけるのではないか。

ただ、ホッケーだけで将来が安泰というわけにはいかず、しっかり勉強もして将来を切り開いていかないといけないので、その点で須知高校には正直なところ不安はあった。しかし、この会議に出席するにあたり、須知高校のことを調べてみると、校長先生の説明にもあったとおり、普通科でもSAなど少人数でしっかりサポートする体制があることも改めて感じる事ができた。

- 須知高校ではなく他校を希望する生徒が多く、須知への進学は昨年度約60%、今年度の志望状況は約30%であり、そこには保護者の意向も影響しているという話があった。現在、私の子どもは中学生だが、必ずしも須知高校より他の高校に行かせたいという意識をもつ保護者が多いとは思わない。食品科学科もあるし、普通科でも他校と遜色のない教育をしていただいている。そして何よりも地元である。通学

距離の問題は保護者としては大きい。自宅から園部高校まで12kmほど距離がある。須知高校だと約3kmである。遠いところだと園部高校まで約40kmほどある地域もある。必ずしも須知高校が近いというわけでもないが、それでも20km程度であればまだ助かっている面がある。地元の学校で子どもたちが学び、地域行事等に積極的に参加して地元に残ってもらえるような教育をしていただければと思っている。

- 現在子どもが中学生で、進路について学校と話をするのだが、子ども自身が将来何になりたいかはっきり決まっていない。そのためどの高校に進めば良いのかを決めかねているのが現状である。そういう子は多いと思う。子どもの友だちに話を聞くと、「京都市内の私立高校へ行きたい。」「サッカーの強いところへ行きたい。」という子はほとんどおらず、近いところに進みたいと考えている。ただ、言葉は悪いが、「須知高校は嫌だ。園部高校か南丹高校へ行きたい。」という子どもの方が多いように思う。

将来、京丹波町で親の仕事を継ぐ子どももいるが、須知高校に行った後すぐに継ぐのではなく、都会へ出て一般企業へ就職するなど、離れて生活したいと思っている子は多いと思う。少子高齢化の問題もあるため、親としては地元に残ってほしいとは思いますが、それは強要はできないなと思いながら子どもと話をしている。このような話がPTAの会議でも出てくるが、大人が道のある程度示してやって、子どもに道を決めさせてやりたいと思っている。今回様々な方の意見を聞かせていただき、それをもち帰って、PTAの会議でも、子どもたちとこのように接していこうかという話ができればと思っている。子どもたちが将来、京丹波町で就職なり家庭を築いていけるよう、府全体の環境としてもっと希望を持てるようになればと思う。

- ◇ 須知高校を選択しない子どもの意見もあるとのことだが、例えばどのような理由で他校を選んでいるかなどについてお聞きになったことはあるか。

- 詳しく聞いたわけではないが、田舎より少しでも都会に行きたいという憧れがあるのだと思う。

- 私も須知高校の出身である。当時は小学区制で、普通科なら須知高校に行くという位置づけであった。また、子どもも同じく須知高校出身で、10年以上前になるがPTAの役をさせていただいた。その際、全国農業クラブ大会や高知のよさこい国体に出場したことなどを思い出していた。その当時を振り返りながら話をしたい。

まず、「須知」高校という学校名だが、「しゅうち」ではなく、「すち」高校と読まれることが多い。当時、すでに少子高齢化の問題があり、須知高校の存続も危ないと感じていた中で、「名前を変えてもらえないか。」と申し上げたことがある。例えば、「丹波高原」という名前も13年前にはあったので、丹波高原を須知高校の前に入れるなど「丹波」というブランドを活かさないで須知高校として大切な名前が薄れるのではないかと考えて意見をあげ、大変お叱りを受けたことを覚えている。

また、当時の校長から、かつて農芸高校の寮長をされていたということで、「農芸高校の新入生は全員寮に入っている。教員は大変苦勞しているが、卒業まで寮に残りたいという生徒は多かった。」という話を聞かせてもらった。今後、食品科学科が大きく伸びていくためには、地元の子どもよりも町外からの子どもを呼び入れる必要がある、当時、寮の運営は教員にとっては大変だとは聞いてはいたが、寮の整備も一つの選択肢ではないかと申し上げたことがある。

府立のトレーニングセンターと近い場所に、府立の須知高校がある。食品科学科に調理師免許をとる学科を設けてはという話もあったが、町と府が一緒になってトレーニングセンターでアスリートの養成をするのであれば、そうした方に対して総合的に食事をまかなうような取組を須知高校が行うなど、調理の学習をしてはどうか。私も調理師養成の専門学校の出身だが、実際に現場に出ないと実力は身につかないものである。高校生の段階から取り組むことにより、より多くのものが身につく

くのではないか。ぜひ丹波自然公園や町の給食センターも一緒になって、実習をカリキュラムに加えていただきたいと思います。

南丹広域振興局で、亀岡市、南丹市、京丹波町と商工会議所が主となって、高校生に地元で就職してもらおうということで、京都中部ものづくり産業ネットワークをつくっていただいた。その成果として、南丹高校の総合学科に工学系列ができ、商工会議所から機械を提供したとも聞いている。須知高校に対しても、「産」がしっかりと努力をして、高校生に実力をつけてもらえる体制づくりが必要ではないかと思う。

また、一番肝心なことは先ほどからも出ているが、「須知高校に行きたいという気持ち」を持つことであると思う。和知から進学する生徒はかなり少ない。先日、就職について須知高校出身者に話を聞いたが、その子は美容関係に進み、今はネイルサロンで働いているが、出身は食品科学科であった。自分の卒業したカリキュラムを生かして就職している子はまれではないか。あまり自分の将来のビジョンとは関係なく、須知高校の食品科学科や普通科を選んでいる。これがいけないこととは言えないが、入学後3年間の中で自分の将来を考える生徒があまりにも多いのではないか。このことが中学生の進路選択に大きく関係し、「違うところに行きたい。」となっているのではないかと思う。その改善もお願いしたい。

あと1点。和知からの交通は不便である。ぜひとも和知からも園部からも通いやすいように、スクールバスを整備してほしい。ホッケーが強いので、その関係でも活用してもらえば良い。町の財政状況はかなり厳しいという話もあったが、須知高校にスクールバスがないということは考えられない。須知高校の校門前は、多いときには送りに来る保護者で混雑する状況である。ぜひ交通の便について考えてもらいたい。

- 私は新制高校の1期目の入学生であった。入学当時は、地域制（小学区制）が施行された時で、望むと望まざるとに関わらず須知高校であった。現在、地元の子どもが他の高校に行っているとのことだが、私たちのようにいわば地域に縛られていた者としては考えられない。

私は栗園を営んでおり、今年、須知高校と農芸高校から2名の生徒が就職してくれたが、素晴らしい若者である。なんとか地域に留める取組をしてもらいたい。

府としては、小学区制でつくった高校について、今ではどこに進学しても良いという形にされているが、地理的な面から非常に不利な点が生じている。そうした点を支援してもらえば、地元で子どもを育てていくことができるのではないかと思う。どういう形でできるかはわからないがそう感じている。

- 和知中学校の卒業であるが、須知高校普通科に和知中学校から入学したのは私たちが最初であった。当時、普通科に和知中学校から進学した生徒が6、7名いたと思うが、資料を見ると今では2名ということで、いろいろな事情はあるかと思うがショックである。やはり、原因の1つは交通事情であるのかと思う。当時は須知高校には寮があった。私も寮に入って先輩といろいろな交流ができて良かったと思っている。今の時代、若者に寮生活がなじむのかどうかかわからないが、家で親にいらまれているよりも楽しかったという感じがしており、普通科にも寮があっても良いのではないかと思う。もう少し皆様の意見を伺って考えを整理したいと思っている。

- 少し前から須知高校と女性の会には深いつながりができている。毎年、ゴーヤの苗を育ててもらい、それを会員に配ってエコにつなげようとして取り組んでいる。毎年800本の苗を作ってもらっているのだが、私も今年初めてもらいに行き、作った生徒と直接話をさせてもらった。苗を作るのはすごく苦勞するらしく、まいた種が全て芽を出すのではなく、その中の何本かが育ってくれる。大変な苦勞をして育てているのだと、生徒たちの思いや苦勞を聞かせてもらって、すごいことをしていると感動した。他にもヨーグルトを作ってもらっているが、私の職場でもすごくおい

しいと評判である。これも作るのにご苦労されていると思う。「いろいろとトラブルがあったりして納品数が足りない。」と先生が申し訳なさそうにおっしゃることもある。こうした作業は民間では難しいことだと思うが、コツコツ生徒が取り組まれていることに対してすごく感動した。今後も続けていきたいと思っている。

私の子どもも須知高校の出身である。もともと看護師になりたいということで、須知高校に進み、その後府立看護学校を卒業して、現在看護師をしている。ただ、先ほどから出ているように、交通の便が悪く、交通費がすごく高い。当時は、下山駅まで電車に乗り、そこからバスに乗るという時代ではなかったので、定期を買うと1ヶ月に4万円かかるなど、交通費のことで困っていた。たまたま私の職場が園部だったので、仕事の行き帰りに送迎をして3年間を過ごした。下の子は英語がしたいということで、園部高校の京都国際科に進んだ。やはり目的に合った学科がある高校を目指すのではないか。私の子どもの場合、中学校から自分で進路を決めていたので、迷わず選択できたのではないかとと思っているが、須知高校を選ぶにあたって交通の便はかなり重要な要素であった。

- 須知高校にはパートナースクール事業等でいろいろお世話になっている。今後、人口自体が少なくなってくるので、どこも生徒数の減少は問題になってくると思っている。今回の議論で須知高校の今後の在り方を考える時に、普通科と食品科学科ではそれぞれ残し方が異なってくるのではないかという気がする。食品科学科は、京都府農牧学校からの長い歴史を持った農業関係の学科を設置しており、他の通学圏からも進学できるということなので、アピールするところを考えて生徒を集めるという施策が必要であろうと考える。一方、普通科については、生徒の多くが大学等に進むことを考えていると思うので、いかに高校卒業後の進学ができる学力をつけていくかで特性を出していくことが必要ではないかとしている。

また、特に食品科学科については、同じ農業関係の農芸高校があるので、そこと差別化し、農牧学校以来の伝統を先輩から引き継いで生徒を育てていくのが良いのではないかという気がする。私は山口県の岩国高校出身だが、岩国も人口は10万人くらいの町で、基本的に自分の町の高校に行くのがスタンダードであり、その意味では口丹地区は交通の便もそれほど良くないため、地元の高校に進むイメージが中学生に定着しているという気がする。岩国高校は進学校であったので、高校卒業後に大半は大学進学のために岩国を離れるが、うち半数くらいはまた地元に戻ってくる。そういう意味で、地元の高校に進むという意識づけが中学校、あるいは小学校ぐらいからあっても良いと思う。

- ◇ 地元の高校に進む意識づけの意見をいただいたが小学校の立場からはどうか。

- 小学校から進路指導をしていくことが最も大切だと考えている。資料を見ると、平成32年度選抜の対象に現小学6年生とあり、3年後に高校進学を考える子どもたちを現在6年生として預かっているのだと感じている。やはり地元を支え、担い手となる子どもを小学生のときから育てていくことがとても大切であり、小学校の時から高校進学を見据えたキャリア教育ができるのではないかとと思っている。

本校を卒業した子どもが蒲生野中学校の8～9割を占めているので、本校のキャリア教育が最も大切だと思っているが、校区にある地元の高校のことを子どもたちはあまり知らない部分があると思う。そのため、昨年から高校と連携をさせていただき、いろいろな取組をさせてもらっている。例えば、駅伝指導に陸上部の生徒に来てもらったり、調理実習の時間に食品科学科の生徒に指導をってもらう取組もしているが、キャリア教育としては、小学生が地元の高校生に憧れを持つ、それから高校に対し夢や希望を持つことが大切だと思っている。その中で、食品科学科の専門性をすごいと思うこともあるし、味夢の里に出されているフィナンシェが須知高校の開発だと知って、それを調べた子どもたちの中には「須知高校ってすごいな。大きくなったら須知高校へ行きたい。」という感想をもった子もいた。地元の高校

を知って憧れを持つことはとても大切だと思っている。

12月に6年生の高校見学をお願いし、校長先生をはじめ、進路指導、教科の先生方に丁寧に話をいただいた。須知高校が日本三大農牧学校の1つで、東大、北大と3つ目がここだと聞いて、子どもが驚くこともあったり、校長先生から、「将来の仕事について自分のイメージを持つことが大事で、小学校での学習が人生を生きていく上での基礎となるから、今しっかり勉強しよう。」という話などもしていただき、食い入るように子どもたちは聞いていた。その後の振り返り学習の感想文の中に、「自分の目的に合った高校に行って頑張りたい。」とか、「やりたいことが見つければそれに向けて進路を考えて将来につなげたい。」と書いていた。このように小学校の時からできることはあると思うので、小学校も含めた地域ぐるみで、私たちの町の高校の活性化に向けて頑張って取り組んでいかなければならないと思っている。

- 昭和63年の京都国体に向けて、旧丹波町・瑞穂町がホッケー競技の会場になるということで、まったくゼロからの出発だったが、当時、素晴らしい指導者に来ていただき、今の須知高校の礎をつくっていただいた。男子・女子ともに全国優勝を果たしている。口丹地域のボールゲームで全国優勝をしているのは、おそらく須知高校だけだと思う。先ほどもあったが、須知高校は全国に行くとき「しゅうち」と呼んでもらえない。「すち」と読まれることが多い。以前、インターハイが佐賀県であった時に全国優勝したのだが、NHKで全国放送された際に、NHKのアナウンサーが『すち』と書いて『しゅうち』と読みます。『京都府代表』と言ってくれた。それについては、いろいろな方からよく頑張ってくれたとお声がけをいただいた。少し低迷した時期もあったが、最近また全国大会に出られるようになってきた。全国的にも須知高校は有名なので、トーナメント表に名前があると「須知出てきたな、久しぶりだな。」という声を聞き、「須知高校はホッケーの学校なんだな。」と改めて思った。指導者が定年間近になってきたので、新しい指導者をぜひとも須知高校に採用してもらいたい。子どもにとってかっこいい、憧れる先生がいることが大切だと思っている。20代のフレッシュな先生を採用してもらって、新しいホッケーづくりができればと思う。須知高校が全国に行って優勝できるような学校になるためには、やはり1学年に最低6、7人は必要になると思う。町の子もだけではなく、口丹地域のいたるところの運動能力の高い子どもが、「須知高校でホッケーをするんだ。」と言って来てくれる学校になったら素晴らしいなと思う。

また、須知高校でホッケーを頑張っていた生徒の中には、AO入試で関関同立に合格した生徒もいる。過去には関東の明治大学や早稲田大学に進学した子もいる。須知高校にそうした実績があることを周知してもらいたいと思うし、頑張っていれば学費免除にしてくれる大学もある。そういうこともぜひ周知して、「ホッケーの学校」「小さいけれども本当に素晴らしい学校」だということを伝えていきたいと思っている。

- 話を聞いていて2つのことを思った。1つは、これは須知高校だけの問題ではなく、口丹地域の他校も希望状況は定員の50%に達しておらず、京都市内に流れているということである。もう1つ、学校の歴史はつくろうとしてくれるものではないということを我々は考えるべきだということである。農牧学校は140周年を既に迎えている。Iターンで来た方が、「三大農牧学校の発祥の学校で、食品科学科もある。すごい学校ですね。」と言われる。同窓会ももう一度原点に戻って、やはりこれだけの歴史を持っているということをしっかりと踏まえなければならぬと思った。

資料によれば、5年後には中学3年生が100名になる。つまり3年生数では今の定員が埋まらないという状況になる。従って、逆にIターンのように人を呼び込む流れをつくる必要があるのではないか。北海道の三笠高校のように市がバックアップして取り組んだ例もある。同窓会もそういうことをしっかりと発信していかなければ

ばならない。

中学生の進路希望状況を見るとショックを受けるが、危機感を持って学校や町とも連携をしながら提案をしていくことが必要である。要望だけでなく、こんな学校であるべきだと前向きに提案するという当事者意識を持たなければいけない。この会議がそうした提案の場になれば良いと思う。

- 須知高校のこの問題は、少子化を背景とした課題だということを改めて痛感しながら聞いていた。そういう背景を踏まえながら、地元の義務教育を所管する者として、2つの点で今後の在り方の検討の方向性についてお願いをしたい。

1つ目は、京丹波町の現在の中学校3年生をはじめ、全ての子どもがきちんと高校教育を受けられる方向での在り方検討をぜひお願いしたい。進路希望を見ても進路先は非常に多様化している。しかし、過去の統計を見ても毎年増減はあるが、概ね4割前後は須知高校へ進学している。この地域は広域で、しかも公共交通機関がきちんと整備されておらず、交通費が非常に高額になる。須知高校をはじめ口丹地域も含めた公立高校全体の有り様とも大きく関わっていると思うので、全ての子どもが高校教育を受けることを担保できる方向での議論をお願いしたい。

2つ目は、少子化を背景とした高校の在り方について、公教育は一人一人の子どもの学ぶ権利を保障するという役割、また、教育は次の時代を準備するという役割を常に果たしてきたと考えている。少子化時代とは言い方を変えると、地域創生をいかに進めるかという時代だと思う。したがって、須知高校が地域創生の時代をどのように拓くのかという視点で是非とも在り方を検討してもらいたい。

参考になる事例として、島根県の隠岐島前高校がある。ここは1学年2学級80人の学校であった。地元には80人以上いるのに実際に進学する子どもが27人にまで減り、いよいよ廃校かという時に、町を挙げて島前高校の在り方を検討され、最終的には昨年度、80名募集に対して80名以上の生徒が志願した。日本海の絶海の孤島に、他地域から行きたい高校として多くの生徒が志願した。地元にとって、高校を残すことは自分の町、地域を残すことだという想いであったという話を視察時にお聞きした。京丹波町にとっても程度の差はあれ同じ課題であることは確かである。したがって、須知高校のことを考えるにあたっては、京丹波町の町づくりに資する高校の有り様について考えるべきであり、京丹波町における須知高校の在り方懇話会でもすでにその方向性を出していただいている。この地域の子どもは減っていくが、そんな時代であっても高校がこの地域の創生にしっかりと役割を果たし、そういう高校に多くの人が魅力を感じて町外からも来ていただける。いわば地域創生のモデル校としての須知高校の今後の充実に向けて、地元教育委員会としても全力をあげて一緒になって取り組みたいと思っている。府教育委員会もそういう視点で是非とも検討いただくようお願いしたい。

- 産業教育として、農芸高校との棲み分けが重要だと思う。ただ、地元には食品関係の企業はたくさんあり、卒業生で起業されている方もいらっしゃる。食品科学科についてはそちらと連携できれば良いのでは。そのためにまずは産業としての食品関係企業が元気でないといけない。行政側の課題もそこにあると思う。子どもが少なくなることは全国同じであるが、その中で京都府内への移住、定住の取り組みを促進して、生徒や保護者を育てていかななくてはならない。

なお、部活動の維持については大変大きな課題だと思う。サッカー部員が5名、バレーボール部員が2名であったり、非常にショッキングな数字だ。

- 須知高校の在り方を巡って、このように各界、各層の方々がお忙しい中、一堂に会して真剣な議論がされたことは初めてのことだと思う。これほどありがたいことはないという想いで受け止めている。また、それぞれのご発言に大変な重みがあると実感している。須知高校の存立の危機が叫ばれて結構時間がたっているが、こうして総合的に考えることについては、緒に就いたという感じがある。



資料を見ても、また、将来の町の子どもの出生率を見ても本当に厳しい状況であると受け止めている。しかし、町を預かる立場として、須知高校は町唯一の高校でこの町の宝だと思っており、町民の皆様全員に須知高校の在り方をしっかり考えていただきたいと思う。そのきっかけを与えるためには、私たちがいろいろな情報を住民にお知らせしなければならない。須知高校は本当に歴史も伝統もあり、校地も全国で一番広いほどの面積を持っている。そうした自慢できる部分をどんどん発信し、住民が須知高校を誇りに思うような意識づくりをしなければならないと思う。今までも皆様それぞれに懸命に努力され、須知高校の先生方も危機感を持って努力いただいていると感じているし、また、行政についても他市町では例を見ないような活性化協議会をつくって須知高校とPTA、町が一緒になって考えることも実践している。そこでの意見を少しでも予算化し、支援できればということで、通学費補助のほか、町でできる限りのことをしようと思っているが、これからも須知高校の皆様と協議して具体化していくことが大切だろうと思っている。

しかし、まだ住民の皆様には危機意識が浸透しきれていないこともあり、今日の会議で緒に就いたということで、これから皆様方の議論を住民の皆様には浸透させ、皆様が須知高校の在り方を考える、全員がそういうメンバーになっていただきたいという想いである。この場の皆様方、住民の皆様、教育関係者、PTA、同窓会の皆様のご意見が重層的に重なって須知高校の今後の支援となっていくことで、数字は確かに厳しいが、須知高校にはまだ大きな可能性、潜在能力があると思うので、それを信じて町もしっかりと支援していきたいと考えている。今後とも何度かこういう会議を開き、将来を見据えて建設的なご意見を賜りたい。

- 須知高校には中学校との連携加配が1名おり、また人事異動で去年の蒲生野中学校の教頭を副校長にお迎えしている。このように中学校とのパイプが太い高校は他になく、本当に生徒募集については去年にも増して様々に取り組ませていただいた。しかしながら現状は本日説明のとおりである。そのため、中学校の校長先生と相談させていただき、今年の中学校3年生がどのように考えて進路選択をしたのかについて、卒業前のタイミングになろうかと思うが、可能であれば保護者のご意見も含めて調査させていただけないかと考えている。

◇ ただいまのご提案については、今後、京丹波町とご相談させていただきたい。

- この会議は何回くらい開催する見通しなのか。目途を教えて欲しい。

- ◆ 今年度中にあと1回又は2回開催させていただき、次年度も引き続き開催したいと考えている。その上で、須知高校の今後の在り方について、府としての方向性を打ち出していければと思っている。

去年の3月に口丹全体の懇話会を行った時には、須知高校、それから北桑田高校の課題が大きいので、それぞれ個別に地元の方々に入っていたいただいた検討の場を持って、今年度内に何らかの方向性がまとめられれば、と申し上げたが、現在12月末であり、また、須知高校への中学生の志望状況も非常に不安定な状況であるため、見極めが必要であると考えている。よって、今年度末までにもう1、2回ほど、府としての考え方をご紹介するなどして、皆様のご意見を伺いながら、次年度も継続したいと現状では考えている。